好頼日記

第篇

特別
へ13
4268
4

高砂文庫

聽もむよばずと。ふろく感ぜし面もちなり。乳媼ハ。ふかく
絶倒いたして。あまたふまじめなる御顔でとろふ。それこそ
そぢかとさまの。主冊の詠たる歌なれといへば。かの女房
ハ。乳媼を叱りてさる洩しそいとをづらしたふといふ。阿
蘇次郎襟もと。刷ろひ。原来土藷の御詠歌ふまなるら。
むべ秩群たる風趣あるけるよと。ふろく感ぶたへてぞ
ニ乃る。那の女房もいとをぢらしさまふもてるせどを。
さをつかとまり。琴といひ香といひ。ふとる今の和歌ハ
どの。風流とる態の趣向あろふぞ。ふをぢたりる三個の漢
子ハ。全然コ蹶壓を興ハ婦人のうたよ奪ハ。ふまのく
差澁たるあたさまれ。負ず精神の。俳の筑ハ。悰へ

91-2159

かねてや。巳が扇子の蝙眼のうたがむうゝさよふる。
那の女房の前よさしいだしゝ。その扇面ハ。ハ。をれる栽
師よつ。その詠調ゝ書て給ぬと。賣弄ぬ。阿蘇次郎
ハ。を見て。ゞどゝ手ふ両把の汗ゝふぎ。つ。女房
そやくかの扇ゝいたゞゝ。ひらきてあをび
ゝ。ゝ人のなハふゝめゝかたゝとゝ思へゝ。ゝゝ。ゝ。ゝ
と走筆ゝる墨痕のうたくゝさ。ちふぐら飛花落葉の
おとくふ。ろの女房數回吟ぜゝうへ。コハなさけふゝ
御詠よて。ちゝろの秀逸とゝたもひ侍ゝといゝ
その人品とも暴へるさゝして賞ゝけゝ。阿蘇次郎ハ又
ゝも前の歌ゝゝ。ゝて。ゝつを語よ儀。ゝさねてゝゝやう。

適問彈たまへる筆の琴ハ。たゝうよ筑紫ゝる松浦撿
校ゞ操たる。ゝらぬ丈とゝ調子ふて。筑前の守殿の
秘曲ゝ。ゝゝうけたまハゝ。鶯舌もいと嫩ゝよハを
ぶう侍らひたまへ。極めて令姐の御瓜音とゝそ紹
ゝゝべる。かゝる秘曲ゝふる人の都がゝふあるべうを
おぼえ侍らず。ゝまバハいゝゝる上蕩よゝはゝる
やらんゝゝまかゝ包まびあゝゝせたまへゝし。女房う
ち聞て。コハおたぼねよあい侍ゝて。いゝゝぢかハゝゝみ
それへ。ゝまゝいゝふかひなきもの。春旗ふゝゝ
でうあゝらゝまふ。ほゞけまゝらをべき。ゝゝゝそゝゝも
ゝうらハい。たのたまふ郎君ゝそ。由あゝげゝる御け

旋風旗と
なりて才子
佞人を遇る

とひ。とく〳〵御名ゑかのらせたまへ。阿蘓次郎いへらく小的ハ西國ゞとの浪士ゆゑ。もとゆを下從のうへふれべ。いうでおゆがましくも名のゆをいべき。さハあるとゞ性とて。律の調子ゑ好ゑもべるゞ。今の御瓜音の有趣ゑをもやらゞ。聞ゆらく太宰の家ゆ。菊の栞といふの秘曲も侍はし。不知火を彈せゆまふうへ。よも菊の栞を知しめさぬゑハ有。今日ハ不思議の幸あゑて。遇故郷の音ゞを承ゆ。一入興深くおぼえゑべゆぬ。かしゆけゑゆど。よゑつゆでゆしあゑバ菊の志ゑりをもあやどりて聞せたまへと。いとせちふのぞをけゆる。ゆの女房うふゞをて。コハくいしくも志ろしめゑを記。その順ハ女児もよく記得もべゆ。やよ深雪。おどうゆねもおろゆ仰をゆるふ。とく彈べて御耳ゑ汚しまゆらせよとゝふ。小姐いたく愉眼して。ひたゑら阿蘓次郎ゆ眷戀おたゆしゞ。おを拭きくようゑと顔うち顧ろゝきゆゑ。なゞひぬうちさハぎて。とらゝゆるさせたまへとゝふおとばさへ。口ごもゆゝいとはづゝしげおを。されどゆは母も。伴へる一族の奶きも。すゝめてやまず。おの時小姐深雪ハ。何ゝハおらず。了翠浅香ふ呼けバ。浅香阿蘓次郎ゞ膝下ゆ居よゆ。いとゝらゝゝゝ扇子ゑさゝをゑ。おをふものかいてたまハゆさゝらへ。我かたの深窓のこハせたまへよとゝふ。阿蘓次郎くだんの扇子ゑゆをあゞをバ。いゝふも姐のあゝぎとゑたばしく。

玉手ふふましらはる香の。身ふふむばかりそのあら
まくうられもてうちかへしけり。珍玩そび光輝奪目
銀地風もかとりなそのるふぞいかふも仰まもはん。
その料まいとまきかくまを。菊の枝とりなし弾せたまへと
いうせちよのそそけるの。小姐はやとら袖かきおはひ。はた
はたとやぎてぐらへぐで乳媼の真柴。阿蘓次郎ふひらひて。
まがかとの姐々はまだ蓋澁深窓まをば。ふでう郎君
たちの前まして容易まらべたまへべき。適間郎君の賞ら
たまへはる梅う香の歌まを。主毋がちうごろ手なけら
まてさうらいき。そい菊の梨とたふを調子なり吝ますも。そ
の扇子の畫賛なふしたまへ。さあらば換兒まして。主毋ふ
も。秘曲なし弾てはいのひたまへと。かはとおふとなとしれ
ば。毋刀自もおまなうべふひやとら調子なし律まおらべかへて
いともやさしなし玉琴なし掻鳴しけり。操ありける。了畏とも
は研あてがひ。往生ぞくめふ寫とまは。顔またく大の阿蘓
次郎。今は推辞ん法もはく。かの琴曲なし聞ふがら。投らく
扇子ふ描しは。たぐ一輪の朝顔まて。時まを名たくろ繪博士が
如なしたくせし筆のあと。阿蘓次郎も一時高興まはうたて。
扇のひるまれおさうらなしてらひはうけのたを
はをおはいれ一村雨のそらしとふをろし
とたぐをらし書くぐせを。恰好梅が香の曲もてけれ
ば。小姐はさらはを。女房たちまぞをて。大の扇なしる

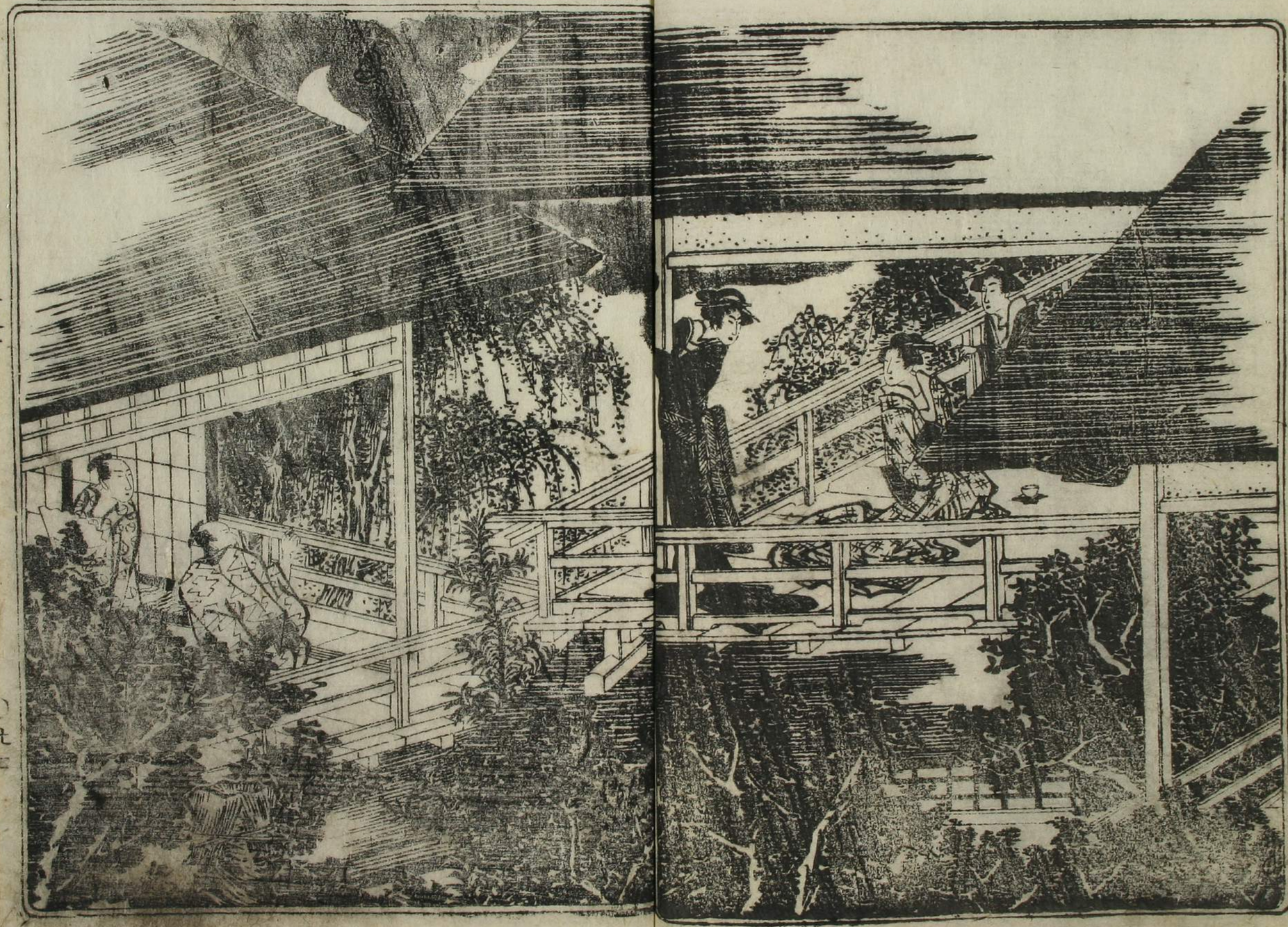
ふ。歌のさまの古雅ふるハ。催馬樂しやらんの調べよや。くさ字様のうつくしきハ。草の葉分よさぐきゆくそのの水莖のよどゝ流るゝいとつゆけくぞ見えふける。かくるとふうち興じて。阿蘓次郎もおぼえす數盃なかさぶけ。微酔まゝ〻ふ人々ふ向ひて。今日いとらずもかく御欵待よあづかる。何酬べきよしもふくまバ。今その扇の繪賛よ手なれけ。はさふき音深ときこえあげ。些二の興ともそへふんと。側よあるゝ蛇皮線なかき抱きさゞし調子の音どゝして。やとらのどゝ彈る。〻蕗のひるまのあさゐなたらす日うげのつきふきかあいき一ひらさかのとらゝとふきかゝ、とゝとゝへゝ彈うたゝふ。その声

如よあいきれをきく人耳なに側たて感よたえず。そゞろに涙とさへぎゝつ。ゝとはらゝとふきゝるとうふ時、天も感應ましけん、まゝとの村雨さらゝとうちそゝぐ。水のうへ船の屋根よも音のゝよそ。夫の雨氣人の肌肉ふきゝて。いとすゞ寒くちよけれ。ゝの時右尤の障子なひらけ、くや黄昏の川面よ。數百千萬螢火の乱を輝煌人京ハ巷の説よいやまさを。阿蘓次郎ゝ〻ゝろつき。日も暮て。婦人でかをのゝの帶に長居せんも影護たゝと。くやも衣紋なかいつくろひ。竟日の饗なに謝ゝ。両個の門弟ないそゞたて。こゝとろ舟へ乘うつをバ。人々名残なれゝをける。ときて小迫ハ。清郎と

今日半日の圓居して。こや十年も馴染しまゝ。けふ
とうまとてへいつの時心のたけ斗あうさんとせんをべも
おきれもひして、秋水もうち潤うふしさ斗。袖よ包て
浅香斗よび。又もとゝやく柳うけ。浅香いとやく心斗
得て。乗後をたゝ筑八ゞ。裾斗ばひきとゞ。やゝあの先
生さまの御名ぬ。ちよとさいまを記してたまはまと、筆と
のべ紙手よ延せバ、筑八いるまず書やゝて。已ゞ舟よ飛
のてゆ、おの時満江ハ一面の螢火よて、宛も白日の如く
ふをバ。かの小姐ハいとのおをおはげよ、阿蘋次郎が影の
かくるゝまで、掉くだす舟斗見送しゞとやもせつふ小見
えとをべ、遺る憾そのやるかとふく、おもかげそひてわをれ

がとをふたけきおゝはふゝをふおつゝて、阿蘋次郎ハ影
の舟ゝ斗漕ぬけおゝふ、いづれも俗趣ふらぬハおけまゞ、
こや興盡ていそぎ前の橋詣ゝあうこ、やゞて一個の逆
旅店斗たづねて、三個おゝよ舎斗おゝ、おのゝ沐浴ふど
おつ。かゝて檻よ靠て眺ゝやをべ。おのゝををもをべて
柳いらふぞあをけるうち戰げる梢のいとあゝやうふる
をまたるふ。お焉東の山の端より一輪の皓月さしのぼて
大さ車輪のごとく。その影一帯の大河よ映し。金の波
ゝぐをたち。山色ハ鬱々として黛をおし。清風徐ゝの
吹こゝう。白露江よ横たハて、凉爽おとおぼをおく、
こををてハ秋の天かとぞおゝ、さくかて縱横よ乱て

道旅の露
墨ゝ二度
才子佳人よ
あく



とびうゑ。百千點の螢火もまの一痕の月のためよたちま
ちよ失ゑ奪いを。さらかへてたる風景のまと眼ざま
きく趣きあるふぞ。ひたをら飽ず望居こう。隣の架
棚よも女の声いとかしがまし。筑八ハむくにけよも
さりのぞけば。おねさを見入たる女の顔ゑ。月光よ
をろ見ば。まゞへべくもれた前の了衆ふぞあてるる。筑
八北叟咲してきいまと這里よても不思議よ環會
てべをもいふ。了衆浅香おを ゑもて。けよ前の風流客
ふてたいしを。師の郎もまをらめ。よろしくやうさせた
まへ。もくろさとふしあらば。一つ房よ舎れんものをといひ
さしけくへしば。やがてまと出来たを。欄下ゑはちて

這方の内ゑ張き。半身ゑあらハし。諸郎おをり在を。
明るばとがかさまの人く石山へ詣で待るれを。諸君
ふも伴ひたひてんやとふ。忠吾筑八ハ渡頭よ船のをち
きて。雀躍けくさうゑく諸ふひ。明日の約束とぞれしる
かくてとのし囲房よ入ぬ。宮城阿蘓次郎ハまど夜
深さに趣出。二個の門弟ゑ汰かこせば。筑八。忠吾目とす
をくしや隣ろう誘来をしやと問よぞ。阿蘓次郎
いへらくきっらず。いそぎ都下へ歸んふん。いざたまへ
こせをたつをば。両個ハきゑ聞て。大よ不興し。雪よ
約せしふともあをば。今日ふんかの美人たちと石山ふ
うちけをもうば。昨日よまとをて有趣かるべし。先

生よも。今一日まげて。吾儔と閑要せたまへとひたすらむ。阿蘓次郎頭ゑうちふうて。歡樂い時ゑ得て極むべし。窮士ハ寸陰ゑ惜ムべしと。その情といましむをバ忠吾筑八いせんをべるく。ふうく望ゑ失ふひて。志ふし師匠の跟よりき。都ゑさして面ゑる。

六田蘭

宮城阿蘓次郎ゑ。鬼道の川舟よ奇遇ゆる。女房ゆちの素姓ゑ委しくたづぬをバ。筑紫ゆる。大宰小貳殿の浪士秋月弓之助ゑ宅眷なゑ。弓之助ゑ渾家と水青といひ女児ゑ深雪とふん喚ける。那の弓之助國ゑ挂冠些の凡葛と托て。洛陽よのぼゑ。圃崎村よ隱を插ゑ。弓之助生得て。その相貌堂々。文武の才ゑ兼全。剩へおのゑ名よ高し。本國筑前よ在ゑしとゑハ。大宰家よ仕へて。二千八百石の秩禄ゑと。一隊長をゆとゆしとぞ。もとより大禄の餘光よて。かく陸沉の身ゑ成ゑても。緊く内福ゑる過活よて。夥の婢僕ゑも使ける。昨日ハ簪纓家の雜色ゑる一族の内室をも誘ひて。宇治の螢見よまかゑたるゑ。さてゑの弓之助ゑ。退仕したる縁故ゑいへ。ゑをよゑさゑ。大宰家の健卒よ。足柄傳藏といふをのゑ。渠ゑ一個の妹よ和蘭とて。天賦ついたる雪落もの。もとより八九分の顔邑ゑ。ゑの和蘭いつの比よゑうゆるゑ藩中の騎士。花圃山十郎と密通ゑるゑ。その

家もと貧かりけるに、山十郎とまふふまて些の人情を使てそつぎける。傳藏ハもとよりを不良ものふまバ自己が榮利成貪りて。蘭が山十郎と通ぜしをいとハしつゝず顔ふぞうちをぎける。阿蘭ハ形のおとを淫婦なりて。またも小野右近といふ武人ふも契成こめて。ふうくいひかいせしうべ。那の右近。おらんが色よめでまどひ。おを百年僧者の老婆よせんと。門戸不對姻姫ふまバよや。乾父といふものをおしらへ。むまく傳藏とも量て。程ちうきふ迎娶んと。その支度をぞいそ成ける。花園山十郎その催を聞とひとしく。勃然として震怒。傳藏成せめとたて。れ蘭いぜひをがかとへ。ぞうしうけをバ。八幡武士道たちがたしと。さんぐふいひのゝしる。右近いまと約束せしことといひ。とまをかくまを。蘭いとが妻ぞと。双方まをすしいひつのを。さあらバ刃鋭よて取て見せんと。共ふ意氣地成たてぬくふぞ。ふたしを旁輩どもハ。三四十人手ぞも。互ひよ荷擔成ふし。向敵手を討果し。蘭成うをひて立退んと。晝夜両家ようち集ひて。今や切ていでんと犇めきける。老分の人く中ふ入噯うひ見をども。おのく馬耳風よ聞ふし。咄嗟大騒動よおよバんとす。その比筑前の國主。大宰小貳殿。御他界あをて。世子龍壽丸君。いまゞ幼少ハしけるゆへ。賢女のをとえある後室紫光禪尼。薫子たをて政成きうせらをぬ。尼公ふとびの

遊婦阿蘭
武蔵花園山十郎
小野石道と
討果さんとし
双方荷担の
人ありて大
騒動に及ひ
けるに秋月
引之助登光
禅尼の令を
うけてこれを
鎮む

騒劇をふらくおどろかせたまひ。物馴てうわぐしをも
ものかまばとて。いそがいしく。秋月弓之助が鎧櫃を呼
出さる。今度の騒動。汝ら隊下のものおほしときく。
いちくやくその場よりも向ひ。無事よりてまつらよと
の上意なり。弓之助かしこまりて。直に馬に飛せて。
闘争の場に馳ゆきける。その時双方白刃をうちふり
已に巷の戦はよどんとて。弓之助は馬に真中に
のりたけ。後室よりあづかりし。背にさし来し。御家の令
旗をぬきとつて。前後左右に麾ぬき。上意しと呼はり
ける。その乱をさいげる。徒黨のもの
どもたちまち風と。東西に。各く地に

ひさまづきて令をきく。弓之助馬上より大音上。御
幼君がおいがおろふし。譜代恩顧の身分として。上の御
為がかへりをす。私の遺恨によりて。どうものならぬ一命
を果さんとは。重々の不忠なり。きつと先非を改むべし。
まつさ傳藏い蟄居ようしたけ。蘭は尼とふし。一生
後付をるとず。ものまば双方の武士はたちまち。御代ど
いりの初ちなまば。そのたびの罪を問はず。寛仁の御制
度をかたじけなくもひ。をやうよ和睦をふして。
さまよりの忠動をこげをれへと。上意と称して諭しける
ふぞ。山十郎ども。右近どのの荷擔人も。ふくそのの道理ふ
伏し。且尼公の御仁心を感じ。蘭だよりふくを仰付らる

うへいをしべちふ夾さむべき意地とてもさうらはず
と。さしもの乱逆たちどころふきづまをしに。全たく弓之
助が一時の機變ふよるものぬを。かゝて弓之助登城さ
て。さのよし後室へ伏禀あぐをば。紫光禪尼御感ま
さかし。御褒賞あをて。禄あまたとらせたまひぬ。その
後世子龍壽丸殿御元服あらせらを。累代の具裘と
をぎ。故のぎいとく。大宰の小貳ふ任ぜらをたまふ。さの
新小貳殿一日鷹野ふ出たまひしが一陣の雲ぬ志の
がんとをづうふあをあり。三四人の近従のを武志たうへ、
御手ふ鷹ぬ居さてらをて。とある菴室ふ入らせたまふ。
ふ戸ぞぬ裏頭まい。剛爐の茶ふきさいぞをてあるじが

いづちへう行けん見えざをけり。小貳殿主従ハさの庵の竹
椽ふ尻かけてやをらひたまふ。そうこう雨もふやをたを。
雌手ふる山脚ふを。袖笠して下を来だるハいとうら
とう化女僧ぬるが。御佛へ供へんとふや。寒菊山茶花ふ
どとをいをたる阿闍梨を手ふさげつさの女僧曾と
見るふを。をが庵ふ息ひたまふ。御方ハさもけたう化御打
扮ぬを。正しく國司ふと猜せしうバ。あたふと垣根ふつく
ごいける。小貳殿ちらと見たまひしが。ふうく懸想ま
さまし。やをらたち来て。かの尼が側ふちうふをたまひ。
面をあげよと仰をるふぞ。女僧いとづかしげふ。顔
をこしあげて背向へるそのさまぶどし王武欺むく

ばうあてゐて、梨花一枝春雨の帶といふ態よていまの雨ふそぐぬをて、あハをふたとやさたるそのすゞ、墨のころも綾錦よて媚きたて、小貳殿名いゐとゝぞと問いせたまへバ、惠春と申、世捨人よくべるといふ、殿い御還るこの道くも近從よかたらせたまい、惜べし絶代の佳人さいの草莽よ埋めてんあと成、さるふてもかる美人のいゐれるゆへふ、尼とゐふてしいぶうしさよと、心あてゞげよのたまハをもバ、おひしくせつきたる、御供のうちふ知人のあて、あをいをい、足拵傳藏とゝうを徒卒ゞ妹よていと聞あげゝる、殿うふづうせらをて、さしいさを往年大亂のとて、いゐゐる女よしあをい、ゝりく騒動よおよバしぞと、久しく不審ををざてしゞ、あとゝふどの標致ふをバ、さあてしも理てよとゝいふく慕しくたばしけゝる、やうてりかの惠春成帳内ふりさせたまひ、たゞふ還俗させらをて、をとの名ふあらためさせ、御側室とゝしぢうせたまひける、外面似菩薩内心如夜叉と說をたるゞゝとく、さの和蘭の方、顏ぐせのあてゐをふい似げふくも、その心いとおどろしく、奸才まさ類をうてゝれバ、佞媚ともて君の心成蕩うしたてまたて、ひとて寵愛成專ふせしうバ、殿い何とゞふしてゝ、おらん成悅バせんと、いちをやく傳藏を擔擧あて、側執事とゐさしめらる、傳藏もとよて、梟獍なるものゐをバ、已よ諂らゝもの成

轡負して首尾をはくろひ、骨鯁の人ハ仇讎のごとく忌嫌さゞ讒ハかまへ、あるハ罪ゑおとし、あるハ黜ぞけ志うべ。世ゑはをくハ小人の習俗ゑ、ゑの傳藏ゝ當路小希旨、榮利と得んと望むものも多かゑ。ゑてゑ邑虬太夫として、一千石の禄ハ給ハゑ、ゑをも隊長ハ勤め志ゞ、一子虬之進ゞためゑ。一個の美女ハもとめて、ゑゑゞ新人ゑせんと、多方心ハ費せしゞ、ある氷人きたゑ、足下のもとめたゑ。注文ゑ、ゑゑひたゑ風流女こそハあんゑゑ。秋月弓之助ゞ女児、深雪といふものゑを世ゑとぐゑたゑ標致ゑゑ。鉄の鞋を踏破て、日本國ハ捜しまこひるとも、ゑゑをより外ふハあるべうもゑしといとはゑゑゑふをくゑけゑゑば。虬太夫父子ハその人ゞらをのとゑ見もし、聞もせしもへ。頻ゑ懇望ゑおもひ、氷人ゑて、秋月家へいひ入をけるゑ。實明緊の弓之助、ヨ比邑親子ゞひとゝ和ゑハ悪ゑ、且その門風ハもいやしゝを居ゑバ、いゝでたやをく氷人ゞ花言巧語ハうけひくべき。百般事ゑ虚托て、固辞とぞいひくゝふちけゑ。虬太夫ハ、ゑをゑ、ゑをのやるかたゑく、暗算、やゞて當時日の出の足掴傳藏ゑとゑ入。重く賄賂ハゑし、さまゝ追縦して、殿の御聲ゞをとねゞひ。秋月ゞ女児ハせゞをゞ妻ゑ御ハけらをやゑ。深ゞ執成とぞたのをけゑ。太宰の少貳殿ハ傳藏ゞゑまゑて即日秋月弓之助邑虬太夫

大空の小貳
高麗鶯野
ふ出てさわる
尾宇は雨や
どり志て女僧
恵春成懸
想あたまふ

高砂堂

を召せらる。汝等ふハ似合ぬ。ろの男女の児ども弘持たるよし、門戸も相應ふるべ。予ら媒弘をるぞ、いそぎ日をゑらみて。婚儀ゆ〻のへちゝるべしと、雷霆撃の厳命ゝ、虬太夫ハよろゝこべども、引之助ハハツトばかりひ、ゝとよ〻て心ゝハそまねども。君命いなむよしもなく、その座いまつ御請ゆふして罷出ぬ。引之助とぼく私邸へ回〻しゞ快快として樂まゞ。渾家の水青ハ氣弘いたゆ。御顔色の常ふらぬバ。いゝぬる怯事ゝ待〻さゝと女児もろともたづぬまべ。引之助ハ數回歎息し、新君色ゝ既〻て。佞人をちこゝぼけたまゝ。てゃ當家も未ふる〻たゞ。足柄傳藏先年の事弘意趣ゝ含ゝ。ゝふと